大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

アメリカ社会におけるホームレスの歴史と現状：社会病理学的分析を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菰渕, 緑 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003475

アメリカ社会におけるホームレスの歴史と現状

―社会病理学的分析を通して―

菰　渕　　緑

はじめに
1．ホームレスの歴史
(1)アメリカ社会の歴史的背景
(2)放浪の歴史と価値観
(3)歴史的ホームレスの顕在化
2．ホームレスの現状
(1)新しい問題としてのホームレス
(2)ホームレスの定義
(3)ホームレスへの道
3．ホームレスと家族
(1)ホームレス・ファミリー
(2)ホームレスの家族類型
結びにかえて

はじめに

これまで日本人の大部分がイメージとして抱いてきた「豊かな国、アメリカ」の像が崩れはじめたのは、1980年代以降のことであろう。アメリカ国内ではそれまでも経済的凋落を示すさまざまな兆候が現われてきていたが、それらがもっとも可視的な形で現われたのがホームレスの存在である。アメリカ社会における病理現象は、高い犯罪率、薬物やアルコール依存率の上昇、離婚に伴う母子世帯の増加、高い失業率と貧困世帯の増大…などが深刻な問題として山積している。しかし日常生活のなかで一般の人びと

が、感覚的なレベルで社会が病んでいることをいちばん容易に理解するのは、ホームレスの姿を通してであろう。その意味で、まさしくホームレスは "The visible poor"(目に見える困窮者)[1]と表現できる。本稿ではホームレスの問題を追求することによって、アメリカ社会に潜む病根を解明していきたい。

1. ホームレスの歴史

(1)アメリカ社会の歴史的背景

ホームレスは現代のアメリカで大きく社会問題化しているが、言うまでもなくホームレスの存在は現代社会に特有のものではない。歴史をさかのぼれば、そこには必ずホームレス的存在が見いだされる。したがってホームレスは普遍的現象ではあるが、その存在が顕在化する時代というものがあることも確かである。そこで、アメリカの歴史を管見することによって、ホームレスの人びとを生み出しやすい時期の社会的背景を探ってみよう。

①植民地時代

アメリカの歴史の出発点はヨーロッパからの入植に求められるが、まずスペインからの入植が先陣をきり、それよりほぼ1世紀遅れて1607年、イギリスの植民地建設が始まる。スペインからの入植者は自国の文化様式を定着させる一方、インディオや黒人との混血も進んだ。ところが、イギリスからの入植は混血や交流が少なく、基本的にイギリスの文化・生活習慣・諸制度などを移し植えた社会として出発したといえる。そのイギリスからの入植者の構成のうち、圧倒的多数は「ハズバンド・メン」と呼ばれた自作あるいは小作農民と、「サーバント」と称された農業・商工業・家事などの労働のための雇用人であった。さらに渡航費用を立て替えてもらう代償に、一定年限奴隷として働かせられる「年季奉公人」は、入植者の三分の一から半数にのぼるという[2]。つまり植民地当初のアメリカは主として中の下ないしは下層の人びとによって構成されていたといえる。しかもこ

の植民地には、人口の五分の一を占める黒人奴隷が存在した。

②ゴールド・ラッシュとフロンティアの時代

時代が下って、1830年代は西部の発展の著しい時代となった。カリフォルニアがメキシコより割譲された直後、砂金が発見され、これをめざしてアメリカ国内からはもちろんのこと、世界各国からも一獲千金をめざした人びとが押し寄せた。カリフォルニアでは1849年に人口が約10万人を越え、西部志向は最高潮を迎えた。このゴールド・ラッシュを押し進めた人びとが「フォーティ・ナイナーズ（49年の人びと）」であり、西部の歴史の一つのシンボルとされている。ゴールド・ラッシュは人びとを西部へ駆り立てる強い動機の一つではあったが、アメリカ人をフロンティアに向かわせたのは、より良い生活と経済的な向上を求めてであったので、毛皮、天然資源、農地の開拓などさまざまな目的が「西漸運動」[3]に付せられていた。のちにアメリカ人の国民性は、しばしばフロンティアと結びつけて語られるようになるが、かれらの頻繁な転居、転職、移動性は西方へ移動をくり返した開拓民の行動様式と共通するとも考えられる。

③大恐慌と不況時代

19世紀の半ばまでアメリカは農業中心の社会構造であったが、19世紀後半から工業化が進み、さらに20世紀にはいると急速な工業化の進展にともない、巨大な独占産業資本が形成された。とくに第一次大戦後、アメリカは空前の経済的繁栄を誇り、政治面でも一躍、世界の指導国の立場に躍り出た。ところが、1929年の大恐慌の勃発により、繁栄の時代から一転して、アメリカ社会はかつてないほどの経済危機に見舞われた。景気は急速に悪化の一途をたどり、労働時間の短縮、賃金カット、大量の解雇などで、国民はいっきょに生活不安に追い込まれた[4]。1930年代初頭には、国民所得は繁栄時の半分に減じ、失業者は1200万人に上ったという[5]。この大恐慌とそれに続く深刻な不況は、アメリカの社会生活のさまざまな面に深い影響を及ぼした。とくに家族生活は重大な危機にさらされた。失業者の急激

な増加によって、婚期も遅くなり、結婚数も1929年の123万から1932年には98万に減り、出生率も千人当り19人から17になった[6]。このような社会不安を劇的に象徴しているのは、1932年に始まった「ボーナス・マーチ」である。経済恐慌の打撃を受けた旧復員軍人たちは、「1917年には英雄—1932年には浮浪人」と叫びながら軍人恩給の増額案成立を要求して行進した[7]。

(2)放浪の歴史と価値観

ゴールド・ラッシュとフロンティアのところで述べたように、移動性はアメリカ人の社会的性格・国民性の特徴の一つとして指摘されることがしばしばある。そもそも国の始まりがヨーロッパからの移民によっているという事実自体が、アメリカ人の移動性の証明にもなっている。ゴールド・ラッシュやフロンティアは人びとの移動を促進する大きな要因ではあるが、そのような直接的契機がきわめて大きな効果を発揮する背景には、もっと根本的な生活哲学や価値意識が潜在していると考えられる。そこで、本節では「放浪」という問題に焦点をあてて、歴史的に振り返っておきたい。

①歴史に現われた放浪者たち

家をもたない渡りものの暮らしはいうまでもなく苛酷なものであったが、彼らあるいは彼らの暮らしかたについては、社会的スティグマを伴うマイナス評価だけではなく、逆にそれらを讃えるプラス評価もなされてきた。それについては後述するが、このような家をもたない、根無し草的放浪者が、ホーボー、トランプ、バムなどと称される人びとであった。彼らの多くは経済的・社会的諸条件が生みだしたものであり、チャンスが限られた社会が生みだしたものである[8]。ホーボーは1875年の統計に初めて登場してくる。もちろんそれ以前も家をもたない路上生活者はいたのであるが、アメリカの鉄道の発達とともにホーボーの存在は顕在化してくる。鉄道に無賃乗車して移動し、ねぐらは「ホーボージャングル」と呼ばれる駅周辺であった。彼らの存在が社会問題化してきた背景には、フロンティアの終了による土地確保の可能性の消滅と新しい産業時代に入って最初の不景気

の襲来とがある[9]。まさしく「物質的進歩」が機関車とともにホーボーやトランプを登場させ、浮浪者収容所を生みだしたといえる。

②放浪に対する価値意識

このような渡りものに対しては、「望ましからぬ人間」「むだな生産物」あるいは英国ふうに「なまけ乞食」[10]というようなスティグマを与えるのが一般的であった。しかし放浪という行為自体に対しては、ある種の肯定的な価値観が存在したことは否定できない。社会によって提供される既存の道徳、規範、価値などから逃れて自由にさすらう生き方は、一部の人びとにとっては確かに魅力的に映った。森や駅や路上をねぐらとし、好きなときに起き、眠くなれば眠る。飢えれば家々を物乞いして歩き、気が向けばあるいは機会があれば臨時の工事仕事や収穫仕事を拾う。一般常識からすれば彼らは明らかに社会からの落後者であったが、視点を換えれば彼らは自らの意志で社会を唾棄していたという見方も不可能ではない。このようにホーボーやトランプに肯定的な評価を付与して描きだした作家の一人にジャック・ロンドンがいる。彼はホーボーの生活と思想を共感的にとらえ、「ザ・ロード」「はずれ者」「路上少年と新入り」「その夜を過ごすホーボーたち」などの数多くの作品を創作している[11]。彼自身、物乞いをしながらアメリカじゅうをさまよい、夜はスラムやホーボージャングルや留置場で過ごす体験をしている。彼の描くホーボーは「陽気な群れ」で、「自由精神の持ち主」[12]であり、時代に反抗する存在であった。ここには彼の社会改革への確信——古いものを踏み台にして新しい、より良い社会が築けるという政治的主張——が反映されていた[13]。しかしそのような思想的背景は別として放浪という行為に対して、一種のヒロイズムが託されていたというのは、アメリカの価値観の一面を示している。

(3)歴史的ホームレスの顕在化

家をもたずに渡り歩く、あるいは路上で暮らすという生活形態がアメリカの歴史上出現しやすかった時代は、本章の初めの部分でも述べたように、

植民地時代、ゴールドラッシュとフロンティアの時代、大恐慌と不況の時代であった。しかし前二者はどちらかといえば休みない移動（restless）に重点が置かれていたのに対して、後者は目的をもたない文字どおりの浮浪（rootless）という色合が濃くなってくる。前述したように、ホーボーやトランプの顕在化は鉄道の敷設と深く関わっている。鉄道工事の臨時労働者、鉄道に無賃乗車して移動しようとする失業者、土地を失った農民などがホーボーやトランプなどの本来の姿であった。このような移動人口はその時どきの経済的な状況によって増減する。最初の顕在化は1875年前後で、当時の雑誌にも「ここ二、三年おそるべき浮浪者現象が突如登場してきた。」と書かれている[14]。そして1890年代に推定6万人程度であったトランプの数は、20世紀にはいると15倍に増加したという。さらに1929年の大恐慌を機にその数は驚異的に激増した。そのなかには数千人の女性もいたという[15]。その後、鉄道トランプの数は減少の一途をたどり、不景気による浮浪者の数は増加しても、鉄道トランプは増加することなく歴史的存在となっていった。

ところでこれまで、トランプやホーボーという名称をとくに区別せず使ってきたが、ここでその違いについて簡単に見ておきたい。

①トランプは働くことをまったく拒絶し、物乞いをしながら放浪する。彼らは責任や制約、精神的に打ちこむことを回避しようとする。

②ホーボーは、肉体労働者で腕に職をもっているが、継続的に働くことをせず旅に出、必要に迫られたときだけ職に着く。ホーボーは人びとが大挙して西部へ向かった頃にできた語で、本来は悪い意味は含まれていなかった[16]。移動労働者にはこのホーボーという語があてはまる。

この両者にバムを加え、次のような表現もされている。ホーボーは働き、かつ放浪する。トランプは夢み、かつ放浪し、バムは飲み、かつ放浪する[17]。しかし、これらは厳密な定義ではなく、三者とも移動人間であるので実際には混同して使われることが多い。

2．ホームレスの現状

(1)新しい問題としてのホームレス

前章では、ホームレスを生みだす歴史・社会的背景や歴史的存在としてのトランプ、ホーボーなどを見てきたが、もちろんそれらは現在のホームレス問題とは異なっている。そこで視点を現代に戻して、ホームレスが社会問題化してきた状況を探っていきたい。

「アメリカというところは誰でもホームレスになる可能性があるの……アメリカの伝統よ。」「ホームレスになることはソー・イージィ。」[18]とアメリカ人をもって言わしめるほど現在のアメリカでは、人びとは簡単にホームレスになってしまうのであろうか。アメリカ社会全体に漂う不安状況、過激な競争社会への不適応は、生け贄を路上へと追いやり、沈殿させていくのであろうか。

> ……「路上」の魅力を知らぬわけでもないから、仕事にあぶれたり、望み薄だったりすると、ついに「路上の人」となり、大都市を渡り歩き、一時しのぎの仕事探しをすることになる……貧しい労働者といううらやましくもない運命を経験すればするほど、「路上」の甘い誘いに身をゆだねることになる。……[19]

この記述はジャック・ロンドンによるものであり、現在のホームレスを述べているわけではないが、失業、大都市、貧困という要素は現在のホームレスにも共通している。現在のホームレスが再び重要な社会問題として浮上してきたのは、1980年代の初期のころであった。この頃まで流布していたステレオタイプ化したホームレスのイメージは、「怠け者、頭がおかしい者、酔っ払い、麻薬常習者」というようなものであった[20]。つまり深刻な問題を抱えた、特殊な人びとがホームレスになっていると考えられてきた。ところがこの10年間でホームレスへの認識は変化し、ホームレスの大部分は運の悪い、普通のアメリカ人と同じような人びとであるという考え方へ移ってきた。つまり1980年代はホームレスが一般化した分、より深刻な社会問題化してきた時期といえるであろう。これほど大量のホームレ

スを生み出した原因はいろいろ考えられるが、直接的には経済問題（不況、失業、賃金の低下など）、住宅問題、福祉政策の転換などがしばしば指摘されている。ホームレスになる原因については次章で論じるが、ホームレス化する直接のきっかけは何にせよ、アメリカ社会そのものにホームレスを大量に生みだすメカニズムが内在していると考えざるをえない。個人のメンタリティ、家族制度、社会構造……など個人レベルと社会システムに関わる諸要因が結び合わさって、80年代以降の新たなホームレスの問題を生起させている。とくにアメリカ社会を支える土台であったミドル・クラスが弱体化し、そのかなりの部分が下層化・貧困化してきているという現実は、従来の階層構成をより底辺へと押しやる力として作用している。これまでの下層（lower class）は、永続下層（permanent lower class）として貧困の世代的再生産をして固定化し、これまでの最下層は社会の枠外へと締め出されて沈澱する（under class）。ホームレスの顕在化はこのような階層構造の変化のひとつの象徴であるといえる。

(2)ホームレスの定義

このように、アメリカ社会はちょっとしたきっかけでホームレス化しやすい状態になっているといえるが、そのホームレス化の契機を探る前に、ここで改めてホームレスとは何かという定義について考えてみたい。まず、マッキニー法（Stewart B. McKinney Act）から採られた政府の公式定義によれば、ホームレスの人とは「定まった、永続的な夜間の住まいのない人、もしくは夜間の住まいが一時的シェルターか、福祉ホテル、ないしは人間の就寝設備として設計されたものではない民間・公共の場所である人」[21]と規定されている。実際問題としてホームレスを厳密に定義することはむずかしい。最も狭義には、路上生活者や緊急シェルター入居者ということになる。これがロッシー（Rossi, P. H.）らのいう「文字どおりの（literal）ホームレス」[22]である。マッキニー法の定義はこれを含んでいるが、ダブル・アップ（double up）と呼ばれる、友人や親族の家に「転がり込んでいる」人びとなどは除外されている。その他にも、ある時点ではホー

ムレスと認定されないが、別の時点ではホームレスになっているという「隠れたホームレス(hidden homeless)」[23]や「ホームレス予備軍(resource people)」[24]が数多く存在し、結局、定義づけはどこまでで線を引くかという相対的な問題になってくる。さらに、慢性的なホームレスか、一次的なホームレスかという期間の問題も関わってくる。ホームレスとそのマージナルな状況の境界は明確ではない。このようなホームレスの定義の困難さは、ホームレスの数の確定も困難にしている。どこまでをホームレスとカテゴライズするかによって、当然、その数は異なってくる。政府による公式発表などでは、定義を厳しく限定することによって問題解決への取り組みの成果をアピールすることも可能であるし、また逆に福祉サイドからは、問題の深刻さを強調するためにホームレスの定義を広くとることもありうる。したがって、現に何らかの援助や対策を必要としている人びと(in need)から、現在のところはなんとかなっているが、ホームレスになる危険性が高い人びと(at risk)[25]まで 連続したつながりとして把握する必要があるだろう。

最も包括的な定義としては、ジャヒール(Jahiel, R. I.)の「ホームレスとは自分自身の家のない生活である」[26]という規定が挙げられる。この定義に照らし合わせれば、家庭内の暴力や虐待から逃げ出した妻や子ども、家賃を払えないために自らの選択ではなしに友人や親族の家に転がり込んでいる人びと、家はないが、少しの間なら安ホテルに宿泊することのできる人びと、シェルターの居住者、福祉ホテルに長期滞在している家族、病院・刑務所・施設などの入居者で、そこを出れば帰る家のない人びと、などはすべてホームレスと見なされる。もちろん福祉的視点からは予防的措置をも考慮に入れてできるだけ広く網をかけるほうが望ましいのはいうまでもない。ただし具体的な政策レベルでは、この中で緊急度によって優先順位がつけられるのもまた、当然であろう。

(3)ホームレスへの道

アメリカ社会全体が遭遇している危機的状況がミドル・クラスの分化を

もたらし、その結果としての貧困化現象がホームレスを大量に生み出す基底要因になっていることは、前述したが、ここでは人びとがホームレス化していく原因や過程について具体的にみていきたい。

ホームレスは貧困のため住居を確保できないことから生じるが、その貧困は利用可能なサービスや社会的援助のキャパシティを越える、個人的な問題状況（disability）の反映でもある。シュット（Schutt, R. K.）らは、「ホームレス関数」として要因間の基本的な関連を次のように提示している。

homelessness＝f(poverty／housing, disability／supports)

この等式は、住居の供給に関連する貧困のレベルが高ければ高いほど、また利用可能な社会的援助やサービスに関連する個人の問題状況のレベルが高ければ高いほど、ホームレスの発生レベルは高くなることをあらわしている[27]。つまり貧困の率が増大し住宅の供給がそのままか低下する場合、ホームレス発生の可能性ないしはホームレスにとどまる率は増加する。虐待や精神的・身体的疾病の状況が変わらないかあるいは悪化している状況で社会的・医療的援助の供給が減少する場合、ホームレスは増加する。

そもそも貧困対策と住宅政策の欠陥がホームレスを生み出しているという指摘は、従来から繰り返しなされてきているが、ホームレスの原因はこの2つに尽きるというわけではない。ジャヒールはホームレスの原因を4つのカテゴリーに分類している[28]。

①経済的要因

(a)状況設定レベル――低コストの住宅の不足、沈滞した労働市場

(b)促進レベル――失業、解雇、立退き、給付金の喪失、家賃の滞納など

②個人的要因

家族関係の崩壊、遺棄、家出、身体的・性的虐待など

③依存・障害（disability）

アルコール・薬物乱用、精神疾患、身体障害など

④自らの選択

放浪志向、家をもちたくない、など

また、モース（Morse, G. A.）は現在のホームレスを1950年代から70年代までのホームレスと比べて、 失業の可能性が高く、実質的により貧しいこと、年齢がより若く、教育程度もより高いこと、マイノリティと女性の数がより多いことを指摘している。そしてホームレスの原因を分析レベルによって、文化的、制度的、コミュニティ、組織的、集団、個人的、の6領域に分け、それぞれについて原発要因と継続要因を析出している。たとえば文化的レベルでは、ホームレスにおちいる原発要因とホームレスから抜け出せない継続要因の双方に関わるものとしてマイノリティへの差別意識を、継続要因として一般大衆の無関心を挙げている[29]。人種的偏見は就労の機会を減じているし、より粗悪な住居、より低い教育程度、社会・経済的上昇移動の機会の減少にも関わってくる。精神的問題やアルコール問題を抱えた人に対する文化的偏見も社会的チャンスを減少させ、ホームレスに導きやすい。また、ホームレスの人びとに対する態度としては、ホームレスは怠け者で、価値がないという見方が一般的であるが、これらはホームレスにおちいった人の自己評価を低下させ、自信を失わせる。今日ではホームレスに対する一般の理解もやや出てきてはいるが、そのため、あからさまな差別は潜在化し、無関心や関わりの欠如という様相を呈してきている。

このモースの原因分析は包括的で、かつ具体的に問題の所在を把握できるという点で、数ある原因分析研究のなかでも有効なものと評価できるであろう。

3．ホームレスと家族

(1)ホームレス・ファミリー

アメリカとわが国のホームレスの実態を比べてみると、決定的な違いはアメリカでは路頭に迷う家族の存在が少なくないことである。わが国でのホームレスは、いわゆる「浮浪者」ということになるであろうが、かれらの典型は男子単身者であり、しかもこの典型以外のホームレスはほどんど見当らない。したがってわれわれ日本人がもつホームレスのイメージも、

表1　ホームレス化の諸要因

分析レベル	原因に関わる要因 ホームレス状態の開始	ホームレス状態の継続
文化的	マイノリティへの偏見	一般の人びとの無関心
制度的	失業 低所得者向け住宅の不足 財政援助プログラムの削減 脱施設化 ／	コミュニティ援助サービス供給の失敗 ホームレスのための公的施設の欠如
コミュニティ	都市再開発政策	
組織的	住所要件(1) 居住期間要件(2) 対象者資格(3) 差別的決定(4) サービスの利用困難性 不適切なサービス サービスの打ち切り	
集団	社会的援助の不足	
個人	障害 ／ 無能力 個人的選択	適応過程

Morse, G. A., "Causes of Homelessness", in M. J. Robertson et al. (eds.), "Homelessness", Plenum Press, 1992, P.14

(註)各欄のまん中にある項目は、「開始」および「継続」の両方に関わる要因である。

(1)ある種のサービスを受けるためには、固定した住所が必要な場合がある。この要件を満たさないために、収入援助や食料スタンプを受けられない人びとが多い。

(2)新しく移動してきた人は、一定期間、福祉サービスが受けられない。

(3)コミュニティによっては、暴力、虐待、性的逸脱などの経歴がある場合は精神保健プログラムのサービスが受けられないことがある。

(4)政策そのものではなく、その運用によってサービスが受けられないこともある。多くの機関のスタッフは、サービスの受給決定に関して、差別的な扱いをすることがある。対象者によっては、もう安定していて援助が必要でないとか、敵対的・反社会的であるとかいう理由でサービスが受けられない場合もある。

「駅や地下街や公園でダンボールを掛けて寝ている中年以上の男性で、酒に酔っていたり、わけのわからないことをわめいていたり、無気力になっていたりする人」というのが一般的であろう。日本人的感覚からいえば家族連れで路頭に迷うというようなことは、飢饉や災害に襲われた開発途上国か、内乱や戦闘が続く政情不安定な国に起こる現象で、「先進諸国」ではありえないと考えがちである。しかし、その「先進国」の最たるものであるアメリカではホームレスの家族の存在が社会問題化するまでに至っている。ホームレス・ファミリーの正確な数を把握するのは困難であるが、全ホームレス人口のおよそ三分の一が家族であると見積もられている。また、3万～5万人の子どもが親といっしょのホームレスだということである[30]。

では、なぜアメリカでホームレス・ファミリーの数が増加しているのであろうか。最も根本的な理由としては、貧困と低所得者むけ住宅の不足が挙げられるが、家族の不安定さの増大――伝統的核家族の衰退もホームレス・ファミリーを生み出す大きな要因となっている。貧困家族は家族としてその単位を維持していくのは非常に困難になってきている。貧困家族のかなりの数が、たいして安全ではない「安全ネット」からこぼれ落ちてホームレスになっていく[31]。家族の不安定性と家庭内暴力は一時的なものであるにせよホームレスを生み出しやすい。今や婚姻率の二分の一に匹敵する離婚率と都市家族の六分の一がなんらかの形態の家庭内暴力を抱えているという事実は、家族の崩壊の現状を端的に示している[32]。離婚や家庭内暴力は女性、女性と子ども、青少年の家庭からのエスケイプを招きやすく、その結果、ホームレスを生み出すことにつながる。さらに家族の不安定さは、薬物やアルコール依存や遺棄を生じやすく、これらもホームレスの主要な要因となっている。女性が世帯主である家族の場合、貧困ラインを下まわる世帯数は1980年代になってから劇的に上昇し、1970年代のほぼ2倍になっているという。とくに黒人やヒスパニックの女性が世帯主である家族では、半数以上が貧困線以下の生活状態である[33]。

しかしながら、同じように貧しい家族がすべてホームレスになるとは限らないのであって、経済状態が同程度であってもある家族はホームレスに

なってしまい、ある家族はホースレスにならずにいられるという、その原因を探ってみたい。

ワイツマン(Weitzman, B. C.)らは、ニューヨークにおけるホームレス・ファミリーと住宅扶助を受けている家族との比較調査から、ホームレスに至る三つの共通の軌道を見い出した[34]。まず第一のタイプは、安定した住宅状況から突如ホームレス状態に陥るというものである。これは追い立てや家賃の支払い困難による。これらのタイプの家族は低所得者向けの公営住宅ではなく、民間のアパートなどに住んでいて、住宅扶助以上の家賃を払っていることが多い。夫や男友だちによる虐待が、引き金になる場合も少なくない。

第二のタイプは、安定した住宅状況から徐々に生活状態が悪化し、「ゆっくりと滑り落ちて」ホームレスになるというものである。まず、安定した住居を失い、どこかの家に転がり込むダブル・アップの状態になる。さらに同居している家の家賃も負担できなくなり、その家族との葛藤からついには家を出ざるをえないようになり、いくつかの家族を転々とするが、結果的にホームレスに至る。

第三のタイプは、長い間、独立した住居を確保したことのないもので、典型的には若い母子家庭で、親や家族の家に同居していたが、そこからシェルターへと移っていく。

ホームレスの家族はほぼこのような3つのタイプの軌道を経過して、ホームレスに至ったといえる。

(2)ホームレスの家族類型

ところで、ひとくちにホームレス・ファミリーといっても上述したように、ホームレス化の過程も異なっているし、家族の形態もさまざまである。ここではミックチェスニー(McChesney, K. W.)による母子世帯を主とした4つのホームレス家族の類型を掲げておきたい[35]。

①失業中のカップル

ときには仕事にありつけたり、ときには仕事がなかったり、そんな繰り

返しをしているのがこの類型の家族である。かれらが家族を養えるかどうかは、社会の経済的サイクルによる。好景気のときは仕事に就けるが、不景気になると特別な技能をもっているか、よほど運が良くないかぎり仕事がなくなってしまう。そして時おり見つかるパートの仕事をしたり、失業手当を受けたりしてなんとか家族を養う。その失業手当もきれると、AFDC（Aid to Families with Dependent Children）-UP（Unemployed Parent）を受給することになる。しかしこのAFDC-UPが1989年までなかった25州の失業カップルには扶助がなかった。

失業カップルの典型は、30歳代の夫婦で学齢期を含む 2 人またはそれ以上の子どもがいる。夫は以前フルタイムの仕事で家族を養ってきており、その仕事は建設労働者や工員などのブルーカラーであった。かれらは伝統的な家族で、夫が家族を養い、妻は子育てをすると夫婦ともに考えている。この性別分業はシェルターへ入っても維持され、夫が職探しに行っているあいだ、妻はシェルターにとどまって子どもの世話をしている。

②パートナーとの関係を終結した母親

パートナーとの関係が終って、シェルターへ来るまで、彼女たちは結婚していようがいまいがシングル・マザーとしてやってきた。男性のパートナー（夫も含む）と暮らしているときは彼が家族を養っていたが、関係の終結後は彼女たちは自分自身や子どもたちを養っていく術をもたない。パートナーと別れると、彼女らは自分自身が世帯主の新しい家族を形成するが、収入はなく、「新しい貧困者」になる。この貧困のパターンは他のホームレス家族類型とまったく違っている点で、他のタイプはホームレスになる以前から貧しかったのに対し、このタイプは貧しくなかったことも多く、彼女らは男性パートナーとの別れによって突然、このような状態に陥ったわけである。

このタイプの典型は、20歳代後半の女性で 6 歳未満の子どもが一人かそれ以上いる。以前は安定した住環境で、家族を養ってくれる男性がいた。一般的に、彼女の学歴は高校卒で、子どもが生まれるまで働いていたが、

それ以降は家庭外で働いた経験がない。関係終結後、自活していけないので緊急的にAFDCを申請する。シングル・マザーになった彼女らの主たる経済的障害は職がないことである。そして職に戻るための子どものケアが不足していることも障害になっている。このタイプの母親は、のちに述べる類型の母親よりも教育程度が高いことが多いので職が見つかり、子どもの世話をしてくれるサービスや施設ががあれば、状況が良くなる可能性が高い。

③児童扶養家族手当を受給している母親

児童扶養家族手当(AFDC=Aid to Families with Dependent Cildren)を受給している母親は、現在のホームレス状態の前から常習的にこの手当が主たる収入源であったすべての家族形態を含む。この類型のほとんどはシングル・マザー家族であるが、少数ながら職のない男性のパートナーで彼の女性パートナーのAFDCに頼っているケースもある。前述した「失業したカップル」との違いは、この類型は明らかに母親が世帯主であり、彼女の男性の同居者—通常は「ボーイフレンド」と呼ばれているが—決して家族を養うことはないし、母子ユニットの周辺にいる存在である。

このタイプの典型は子どもが二人かそれ以上いる母親である。彼女らは高卒以下の学歴であり、職歴も少ない。彼女らの生活歴はシェルターにいる他の家族に比べて、危機に次ぐ危機ではあるが、これは別に今、突然始まったことではない。ここが前述の失業したカップルやパートナーとの関係を断った母親との違いである。このタイプの家族は長期にわたるAFDCの受給者者であり、学歴の低さ、職業技能や経験の不足のために貧困から抜け出せる仕事に就ける希望がほんどない。彼女らがホームレスになった理由は、1980年代の住宅市場では、AFDCの給付が住居費のコストと子育ての費用を賄うにはじゅうぶんのものではなかったことによる。

④ティーンエイジャー時代からホームレスの母親

ティーンエイジャーのときからホームレスで、現在子どもを抱えている

母親は、他の3つの類型とはまったく異なっている。年齢的にはもっとも若く20代前半ぐらいで、子どもも一人、それも幼児であることが多い。彼女らは子どもが生まれてからAFDCを断続的に受給していることもあるが、上記の類型（児童扶養家族手当を受給している母親）はAFDCを安定した扶助の手段として利用しているのに対し、このタイプはその受給状況にむらがある。彼女らは非合法的な仕事によって生計をたてていたことが多い。

このタイプの母の典型は、自分自身の家族からひどい虐待を受け、その結果、養護施設へ入所したり、里親に養育されたというものである。しかもそこでしばしば性的虐待を受け、その場所から逃亡して路上生活にいたる。ホームレスのティーンエイジャーである若い女の子たちは、まともな労働市場に参加することができず、売春によって生活していくことを学ぶ。そして子どもが生まれれば初めてAFDCの受給資格ができるのである。その過程は、肉親からの身体的虐待→養親からの性的虐待→逃亡→路上生活→売春→子どもの誕生→AFDCの断続的受給、という道筋をたどっている。彼女らの多くはほとんど教育を受けていないので読み書きさえできず、家族からは見捨てられ、子どもだけが生きていく理由（精神的な生甲斐という場合と、AFDCが受給できるので子どもの存在が文字どおり生活の糧になっているという場合もある）だというような状況にある。シェルターに入居しているいろいろなタイプの母親のなかでも、このティーンエイジャーからホームレスであったタイプの母親はもっとも悲惨で、希望が見いだせない。彼女らはこの世で一人っきりで、気づかってくれる人もなければ、助けてくれる人もない。しかも彼女たちの子どもはまさしく第二世代のホームレスになるのである。

結びにかえて

「豊かな先進国」であるはずのアメリカや西欧諸国で、人間としての最低限の福祉レベルも保障されていないホームレスの存在が深刻な社会問題化しつつあるという事実は、おそらく日本人にとって大きな驚きであろう。

日本の社会福祉制度が充実しているとはいえないが、今の日本の社会で母子やティーンエイジャーが住むところもなく、路頭に迷うという状態がほとんどないというのも事実であろう。これは日本が欧米諸国に比べてこれまで良好な経済状況を維持できてきたからであろうか。あるいは日本の家族崩壊の程度が低く、これがホームレス増加の抑止力になってきたのであろうか。もちろん日本においても、いわゆる浮浪者やホームレス予備軍としてのドヤ住まいの日雇労働者の存在が福祉政策の課題となっているが、ホームレスに陥る可能性が一般のミドル・クラスにまで浸透しているという危機感は欧米諸国ほど切実なものとはなっていない。しかしそのことを手放しで喜べるほど、わが国の社会状況が優れていると思っている人も少ないであろう。もし今後、日本の経済状況が欧米並に悪化すれば、ホームレスが増加する代わりに一家心中や親子心中が増加するかもしれない。確かにホームレスを生み出す直接的な契機は貧困と低家賃の住宅の不足であろうが、人をホームレスとして生きさせる理由はもっと複雑な社会構造的、文化的、価値的背景をもっているのではないだろうか。アメリカのカリフォルニアで "Change, Please.（小銭をください）" と言いながら立っていた若い、屈強な黒人青年や、ロンドンのピカデリー・スクエアでうずくまっている虚ろな眼をしたアルコール依存の老人の浮浪者に"Are you all right?" と言いながら彼の前に座り込んで、買ったばかりのハンガーガーを差し出していた若く美しい女性の姿を目のあたりにするとき、社会による価値の相違が浮かび上がってくるようである。

註および参考文献

(1) Blau, J., "The visible poor—Homelessness in the United States", Oxford University Press, 1992.

(2) 今津晃　他編『アメリカ史を学人のために』　世界思想社　1987年　53-54頁

(3) 有賀貞　他編『概説アメリカ史（新版）』　有斐閣　1990年　175頁

(4) 同上　137頁

(5) 清水博　編『アメリカ史』　山川出版社　1955年　182頁

(6) 中屋健一『アメリカ現代史』　いずみ書院　1965年　123頁

(7) 同上　124頁

(8) Feied, F., "No Pie in the Sky—The Hobo as American Cultural Hero in the Works of Jack London, John Dos Passos, and Jack Kerouac", The Citadel Press, 1964. フェイエッド著・中山容　訳『ホーボー　アメリカの放浪者たち』　晶文社　1988年 8頁

(9) 同上　10頁

(10) 同上　8-16頁

(11) 同上　61-62頁

(12) 同上　58-61頁

(13) 同上　60-61頁

(14) 同上　10頁

(15) 同上　16頁

(16) 同上　21頁

(17) 同上　23頁

(18) 同上　157頁

(19) 同上　37-38頁

(20) Bringham, R.D., et al.(eds.), "The Homeless In Contemporary Society", SAGE, 1987, p.77

(21) Institute of Medicine, "Homeless, Health, and Human Needs", National Academy Press, 1988, p.137

(22) Rossie, P.H., et al., "The Condition of the Homeless of Chicago", Univ. of Massachusetts Social and Demographic Research Institute, 1986.

(23) Schutt, R.K., et al., "Responding to the Homeless: Policy and Practice", Plenum Press, 1992, p. 3

(24) Roth, D., et al., "Homelessness in Ohio: A Study of People in Need", Ohio State Department of Mental Health, 1985.
ロスらは、この "resource people"という用語を、路上やシェルター以外で夜を過

ごせるホームレス（たとえば、doubling up もそうであるし、数日間安ホテルに滞在できる人たちなども含まれる）を指して使っている。

(25) Blau, op.cit., p. 8

(26) Jahiel, R.I., "Homelessness: A Prevention-oriented Approach", The Johns Hopkins University Press, 1992, pp. 2 - 3

(27) Shutt, op.cit., p. 3

(28) Jahiel, op.cit., p.52

(29) Morse, G.A., "Causes of Homelessness", in M.J. Robertson, et al.(eds.), "Homelessness—A National Perspective", Plenum Press, 1992, p. 5

(30) Walsh, M.E., "Moving to Nowhere—Children's Stories of Homelessness", Auburn House, 1992, p. 4

(31) Walsh, Ibid., p. 2

(32) Ropers, R.H., "The Invisible Homeless—A New Urban Ecology", Insight Books 1988, p.111

(33) Ropers, Ibid., p.111

(34) Weitzman, B.C., et al., "Pathways to homelessness among New York City Families", Journal of Social Issues, 46(4), 1990, pp.125-140

(35) McChesney, K.Y., "Homeless Families—Four Patterns of Poverty", in Robertson, et al., op cit., pp.246-251